



特集 海外留学することの意義

目次

【事例紹介】	1
フィリピン短期英語留学市場の今後 -国際共通語としてのフィリピン英語- Studying English in the Philippines Market Trends フィリピン観光省アシスタントディレクター 横山 泰彦 YOKOYAMA Yasuhiko (Assistant Director, Philippine Department of Tourism, Tokyo Office)	
【事例紹介】	9
ニューカレドニア留学の魅力 -“日本に一番近いフランス”での異文化体験- Invitation to French Language Study in New Caledonia: Unique Cultural Experience in the Closest French Territory to Japan ニューカレドニア観光局日本支局長 小早川 薫 KOBAYAKAWA Carol (Director, Japan New Caledonia Tourism Office)	
【海外留学レポート】	16
メデジンに魅せられて -語学だけではない留学- Attracted to Medellín: Studying Abroad for more than Studying Language 東京外国語大学国際社会学部ラテンアメリカ地域スペイン語専攻 佐井 暢穂 SAI Nobuho (School of International and Area Studies, Tokyo University of Foreign Studies)	
【海外留学レポート】	23
留学のすすめ -留学で学ぶ、自分- Take a Chance to Study Abroad: Discovering Myself in Vietnam 株式会社丸井グループ 二階堂 夕海 NIKAIDO Yuumi (MARUI GROUP CO., LTD.)	
【インフォメーション】	27
平成29年度外国人留学生年間受入れ状況調査、並びに、外国人留学生進路状況・学位授与状況 調査結果の公表 日本学生支援機構留学生事業部留学情報課企画調査係 (Information Services Division, Student Exchange Department, Japan Student Services Organization)	

【事例紹介】

フィリピン短期英語留学市場の今後

-国際共通語としてのフィリピン英語-

Studying English in the Philippines Market Trends

フィリピン観光省アシスタントディレクター 横山 泰彦

YOKOYAMA Yasuhiko

(Assistant Director, Philippine Department of Tourism, Tokyo Office)

キーワード：フィリピン、英語留学、ASEAN、短期留学、オンライン英会話、英語教育、海外留学

1. はじめに

フィリピン英語留学は、1990年代中頃より韓国人が始めたビジネスモデルです。大学への進学、就職に英語が必須の韓国で、どのように英語を短期に、しかも安価で身につけることができるかで着目した先がフィリピンでした。

日本からは2000年代初頭より、大学生などがネットで海外英語留学先を調べ、フィリピンに短期留学を始めました。その後はリピーターとなり、口コミで徐々に広がり始めました。フィリピン観光業界でも話題には上がりましたが、フィリピン英語留学が今日のように海外留学の一角を占めるようになるには多くの関係者も懐疑的でした。それでも弊省にも問い合わせが増え、フィリピン専門の留学エージェントが出来始めたので、将来も継続可能で健全なマーケット発展を目指す目的で、2010年1月には英語学校、留学エージェントと共にフィリピン留学普及協会(PSAA)が東京で設立されました。

テレビ、雑誌、新聞などのメディアが、多くの韓国人の留学生在がフィリピンで英語を学んでいる現状と共に、日本人留学生のインタビューなども含めてフィリピンでの短期英語留学を特集として取り上げていただきました。このように注目を浴び始めたのが2010年で、日本におけるフィリピン短期英語留学元年と言っても過言ではないでしょう。

2. 経済成長を続けるフィリピン

フィリピンは7,641もの島々からなる群島国家で、島の数だけ伝統や文化など多彩な魅力に溢

れる国で、面積は日本の北海道を抜いた大きさです。人口は1億419万人（2016年）で、出生率は2.7（日本は1.4）、毎年人口が2%増加しており、2、3年以内には日本の人口も超えてしまうとされています。特に若い世代が人口の大半を占め、中央年齢は23歳（日本は46歳、中国は37歳）で、生産年齢人口が他の国と比較して大きいため、経済成長が後押しされる人口ボーナスが2062年まで長く享受できます。

実際2010年のアキノ大統領から2016年のドゥテルテ大統領就任後も、フィリピンの経済成長は6%から7%の高水準で推移しています。これは政治の安定、政府の効率性、腐敗撲滅が進み、海外からの投資のみならず国内企業の投資が増加したことによるものと推測されます。フィリピンでは、国内での就業先不足と高い英語能力、真面目でフレンドリーな国民性もあり人口の1割が海外就労者で、出稼ぎ国家とも言われています。彼らの国外からの送金額は年間3兆円を超えており、GDPの7割が個人消費のフィリピンで経済を根底から支えています。職種としては看護師、介護福祉士、船員、IT、サービス業など様々で、米国、カナダ、ヨーロッパ、中東、アジア、日本などで働いています。

しかし昨今フィリピン国内でのオフショア・BPO市場が、これを凌ぐ経済規模として成長しつつあります。英語を使えるグローバルな競争力を持つ若い人材が豊富であることから、新たな戦略拠点として注目されています。コールセンターは既に世界最大規模となり、その他の金融・会計、IT業務、医療情報管理、クリエイティブ系、エンジニアリングなど様々な企業が進出しています。

また、昨年フィリピンへの日本人渡航者数は対前年比8.15%増の631,801人、フィリピン人の訪日数は504,000人で対前年比18.8%増でした。日本では27万人のフィリピン人が住んでいて、在留外国人数では中国、韓国、ベトナムに次いで4番目の大きなコミュニティーを築いています。双方の行き来が活発に増加していますので、航空会社による新規就航、増便、機材の大型化などもあり、年間の航空座席供給数も200万席を超え、更なる価格競争力、サービスの向上が見られ始めました。

3. 国際共通語としてのフィリピン英語

1521年にマゼラン一行が上陸して以来スペインの統治が約350年あり、その時代の文化、伝統は、言語をはじめ今もなお国民の日常生活に根強く残っています。また、その後約50年間のアメリカ統治時代により近代教育制度、英語がもたらされました。群島国家フィリピンには111の言語、文化、民族グループがあり、87の言語が話されていて、その中でマニラ周辺のタガログ語を基礎としたフィリピン語を国語として定めています。

英語は公用語で、小学生から教えられており全国的に通じる共通語でもあります。フィリピンでは、英語に関してはネイティブではなく、取得した言語として English as a Second Language (ESL)とも呼ばれる第2言語です。フィリピン人同士では、タガログと英語を混ぜたタグリッシュが良く使用されていますが、そのひとつに、センテンスの最後にデバと加えるだけで疑問文になる便利な言い回しもあります。

現在英語は75か国で公用語とされ20億人が使用していますが、これは世界人口の4分の1にあたります。ただ、シンガポールのシングリッシュ、オーストラリアのオージーイングリッシュ、ニュージーランドのキウイイングリッシュ、アメリカやイギリスでも地域、人種などにより独特な英語表現、発音をしています。日本でもジャパニーズイングリッシュと言われる日本語脳による表現、発音があるのは共通の悩みかも知れません。フィリピンでは、ネイティブが使うようなフレーズ、難しい言い回しは使わず誰とでも通じる国際共通語としての英語を主に使用しています。

4. 観光省管轄の短期英語留学マーケット

フィリピンへの留学は短期英語留学、大学学部留学、大学院留学や大学間協定による交換留学などがあり、高等教育機関への留学も日本から年間100人弱いますが、この項では短期英語留学について説明させていただきます。

教育旅行は、持続可能な成長のエンジンとして可能性があり、国の威信、フィリピン人の信望を高めるとして短期英語留学を観光省が管轄しています。また、国家観光開発計画で英語留学は、将来性、長期間滞在で観光支出増を見込めるとして、重要な観光素材としても位置づけています。

高等教育機関への留学では留学ビザを取得するにあたり成績証明書など様々な手続きが必要となりますが、1年以内の短期語学留学であれば入国管理局から特別就学許可証 (SSP) を発給します。また、日本人は30日以内の滞在はビザ不要ですが、それ以上の滞在であれば延長申請を SSP 同様入国管理局に申請し、語学学校が代理申請します。

5. フィリピンの英語学校

フィリピン国内に英語学校は北からバギオ、クラーク、マニラ、イロイロ、セブ、ダバオなどに約400校あります。その内日本人が使用しているのが約100校、日系の学校が約50校です。以前は韓国資本の学校が多くありましたが、日本での人気が高まるにつれ日本資本の学校も増えてきました。申し込みは留学エージェントを通してするのが一般的ですが、直接英語学校や旅行会社を通しての申し込みなどが出来ます。

大小様々な語学学校がありますが、選択する際に重要なのは以下の3点を満たしていることです。

- 1) 入国管理局から留学生受け入れの承認を得て、特別就学許可証 (SSP) 発給のため代理申請が可能なこと。



- 2) 講師の指導技術、設備、カリキュラムなどが水準レベルである認定証を、労働雇用省技術教育技能教育庁 (TESDA) から取得していること。



- 3) 観光省に教育施設としての登録



6. フィリピンでの英語留学を推奨する理由

- 1) 日本から近い

日本からマニラまで約4時間、何時でも気軽に留学、研修旅行を計画できます。格安航空会社 (LCC) もマニラ、セブに就航しています。

- 2) ワンオンワン方式の授業

他の国ではグループ授業が主流ですが、フィリピンの英語留学は1対1の対面授業とグループ授業を組み合わせているので、短期集中で英語が身につきます。

- 3) 費用が安い

物価が日本の約半分～3分の1です。

4) 公用語が英語である

フィリピンは世界で5番目に英語を話す人口が多い国です。また、フィリピンでは英語は公用語で、学校、ビジネス、街中でも英語を使う環境が整っています。

5) 優秀な教師陣

難関試験を突破して採用される教師陣は明るく陽気です。また、彼らにとっても英語は、必須・取得科目であるため、躓きやすいポイントを熟知していて、英語を母国語とする教師よりも教え方は、とても親切かつ上手です。

6) 休日の楽しみが多い

白砂の美しいビーチリゾートで、ボートでの島めぐりやダイビングライセンスを3日間で取得できます。また、ゴルフ、スパマッサージ、ショッピング、トロピカルフルーツ、フィリピン料理など様々なことが格安で体験できます。

7. フィリピン英語留学の特徴

1) スパルタ式はフィリピン英語留学の代名詞でもある。

スパルタ式では、平日は外出禁止、強制自習、母国語禁止ルールなどで徹底的に英語勉強に集中できる環境です。母国にいる親御さんが日々の成績などをインターネットなどで監視することも可能です。ワンオンワン（1対1）とグループレッスンでの学習を組み合わせ、学校によっては自習も含め12時間の学習時間が設けられています。主に韓国資本の学校にスパルタ式は多いです。もちろん、マイペースに授業、自由時間を過ごすことができる学校もあります。

2) 学生寮併設のキャンパス型

敷地の中に教室、学生寮、プール、ジム、食堂、売店などがあり、キャンパスから外に出なくても生活が出来る環境を要していて、入り口には24時間体制のセキュリティガードがいますので、治安的にも安心です。学生寮は1人部屋から多人数同居のタイプまで様々です。食堂では毎日3食ビュッフェで提供されていて、部屋の清掃、週1、2回洗濯のサービスもあります。キャンパス以外にも別の場所の学生寮、外部のホテルから通うタイプの学校もあります。日本人学生を受け入れている語学学校の多くは日本人スタッフが常駐しているので、生活の相談などもできます。

3) 様々なカリキュラム

一般英語コース、ビジネスコースのほか、TOEIC、TOEFL、IELTSなどの資格試験対策コース、英語教師のためのTESOL、CELTA、またIT、医療機関、観光など特定のコースは各種あります。タクシードライバー、ホテルのフロントが使う英語など、ニーズに合わせ特化した英語を学ぶことができます。特に、ワンオンワン方式のため、発音矯正、文法、リーディング、ライティング、スピーキング、リスニング、ボキャブラリー、など必須4技能を含めてバランス良く学ぶこともでき、そのための教材などを用意してくれます。まずは学生本人がどのような英語を学びたいのかを伝えることが重要です。

4) 1週間からの短期留学

通常1週間から2、3か月までの滞在が多く、同じ学校で6か月以上滞在される学生はまれで、有給、夏休みなど長い休みを利用される方など様々です。

5) 国際色豊かで、幅広い年齢の学生層

日本、韓国のみではなく中国、台湾、中東、ロシア、ヨーロッパ、ベトナム、タイなど様々な国籍の方々が英語留学しています。また、親子留学、小学生などのサマーキャンプ、中学、高校の英語研修、大学生、社会人、企業研修、英語教師、リタイア後の趣味として学ぶ方など年齢も幅広く、様々な目的で留学されています。

8. 2020年教育制度改革

グローバル化の中、多様な文化や言語を持つ人達と接するにあたり、国際共通語の英語が重視されるようになります。小学校3、4年生から外国語活動が導入、5、6年生の英語正式教科化、中学、高校での英語授業は「英語で行うことを基本とする」と、しています。大学入学共通テストでは、使える英語を身につけるため、積極的に英語の技能を活用し、考えを表現できる力も含め、(書く、話す、読む、聞く)の4技能で評価、資格・検定試験の活用が勧められます。

この歴史的な教育制度改革で、フィリピン短期英語留学業界の役割、担えるところはあるのでしょうか？

9. フィリピン短期英語留学の今後

特に幼児期から小学校にかけては言語吸収力が高いとされているので、親子留学、サマーキャンプなどで、小学校低学年のお子様も英語に慣れ親しむ、楽しんで学ぶ目的で参加する方も増えてきています。中学、高校の夏休み英語研修先として、以前は欧米が主流でしたが、現在は100校以上でフィリピンも行先に含めていて、格安で英語が身につくと高い評価をいただいています。大学入学共通

テストに向けて資格試験対策コースを受講し、4技能評価を高めるニーズは今後も高まるでしょう。また、小学校からの外国語活動の授業が始まり、中学、高校では英語授業を英語で行いますので、教員の需要も高まるでしょう。実際、日本の英語教員が TESOL、CELTA のコース受講されているようです。教科書、音声教材、外国語指導助手 (ALT) の活用もありますが、多くの教員が不安に感じていると推測されます。社会人もキャリアアップのため、海外赴任が決まり急遽必要、社内での環境の変化による英語公用語化など多様です。企業研修もメーカー、銀行、商社、サービス業など様々な職種で、フィリピンでの研修を行うのは単純に英語を身につけるだけではないでしょう。ASEAN 10 各国が 2015 年に発足したアセアン経済共同体 (AEC) は、人、物、サービスの自由化を域内 6 億人で進めており、各国ともに高い経済成長しているのが重要な商圏と捉えての戦略と考えても良いかと思えます。

日本からの英語留学者数推移ですが、正確な統計の把握に苦慮しているのが正直なところです。2010 年には留学関係者からのヒアリングベースで数字を積み上げ約 4,000 名とし、その後右肩上がりに増加し続け、2015 年に 3 万 5 千人とまで公表しています。しかしながら、出入国管理局が発給する特別就学許可証 (SSP) をベースとし活用したいのですが、各支局の SSP に対する期間の扱いなども統一されていないので、まだしばらくお待ちいただく状況です。昨年フィリピンの英語学校を代表する組織として「English Philippines」が設立され、まだ、参加学校は少ないですが、官民協力し健全な英語留学市場の成長と留学者数などの正確な統計作成に関与していただければと願っています。

民間の留学事業者等で構成される一般社団法人海外留学協議会 (JAOS) による日本人留学生数調査 2018 では、アメリカ、オーストラリア、カナダに次いで 4 番目に留学生が多い国になりました。ちなみに前年度はイギリスに次いで 5 番目でしたのでランクアップしています。

10. 変化し発展続ける英語留学ビジネス/おわりに

オンライン英会話業界も多くの講師がフィリピン人で、1日30分で月額5,000円程度の格安な上、好きな時間に勉強できることもありお茶の間留学などと好調の様です。以前は早朝や帰宅後に自宅でスカイプを通じて学んでいましたが、学校内でオンラインブースを設けて自由に学べたり、授業として取り入れるなど勉強方法も進化しています。フィリピン講師との会話からフィリピンに興味を持ち、実際に海を渡り留学するなどの効果もありますので、フィリピン留学とオンライン英会話は親和性が高く、共にうまく利用してこそ学習効果も高まると思われます。また、2020年の教育制度改革もあり、既にフィリピンにおいて実践を積んでいる優秀な即戦力人材を、外国語指導助手 (ALT)、英会話学校での雇用も増えています。

フィリピンの英語学校では、実際に留学生を受け入れると共にオンライン英会話、英語講師の派遣とマルチにフィリピン人講師を活用しているところも出てきています。また、英語とカラダを同時に鍛えるボディメイクプランでは、専任のインストラクターがサポートしてくれるユニークな取り組みも行われています。

かつての留学の定義は一定ではなく、異端なフィリピン短期英語留学が参入して以来、2か国留学など業界は多様性も取り入れながら拡大基調にあるのではないのでしょうか。

参考文献

フィリピン留学普及協会 <https://psaa.jp/>

English Philippines <https://english-philippines.org/>

海外留学協議会 (JAOS) <http://www.jaos.or.jp/>

【事例紹介】

ニューカレドニア留学の魅力

－ “日本に一番近いフランス” での異文化体験－

Invitation to French Language Study in New Caledonia:
Unique Cultural Experience in the Closest French Territory to Japan

ニューカレドニア観光局日本支局長 小早川薫

KOBAYAKAWA Carol

(Director, Japan New Caledonia Tourism Office)

キーワード：ニューカレドニア、フランス語留学、異文化体験、CECR、フランス語試験、海外留学

ニューカレドニアは“日本に一番近いフランス”

フランス領ニューカレドニアは、オーストラリアの東、ニュージーランドの北に位置する南太平洋の島国です。本島であるグランドテール島を中心に、ロワイヨテ諸島やイル・デ・パンといった多数の美しい島々によって構成されています。この島が、日本で“天国に一番近い島”として知られるようになったのは、1960年代に作家・森村桂の旅行記『天国にいちばん近い島』が当時のベストセラーとなったことから。この作品はその後、映画化もされ大ヒットを遂げました。現在も青く輝く海と白砂のビーチが美しい高級リゾート地として、本国フランスはもちろん、オーストラリア、ニュージーランド、日本などから数多くの観光客が訪れるデスティネーションとなっています。

歴史的には1853年、ナポレオン三世によってフランス領となった後、1946年には植民地としての地位を脱してフランスの海外領土として認められました。さらに1999年以降は、フランス共和国の一部でありながらも、特定地域にて自治権を有する「特別共同体」という位置づけを獲得しています。

そんなニューカレドニアは、日本（成田・関空）からは直行便で約8時間半と近く、“日本に一番近いフランス”でもあります。時差もわずか2時間で、移動による体の負担が少ないデ



ステーション。また、年間の平均気温は約 24 度で際立った雨季もないことから、“常春の国”とも呼ばれています。日本の夏には避暑地、日本の冬には避寒地としてうってつけで、観光にはもちろんフランス語留学においても、時期を選ばずに訪れていただける場所です。

親日で治安がよく、長期の滞在にも安心

ニューカレドニアには、明治～大正時代に約 5500 人もの日本人がニッケル産業従事者として移住してきた歴史があります。勤勉な日本人はニューカレドニアの人々からも温かく迎えられ、その多くは鉱山労働者としての契約期間を過ぎてもニューカレドニアに残り、現地で家族を作りました。

その後、ニューカレドニアに移り住んだ日本人は、第二次世界大戦によって敵国国民とみなされ日本に強制送還となったため、現地の家族とは離れ離れになってしまうという悲しい出来事も起こりましたが、実は現在も「タナカ」「ワタナベ」といった日本人姓を持つ日系二世・三世が数多く暮らしています。そのため、人々は非常に親日。街なかの案内板には日本語表記も少なくなく、ヌメアのたいていのレストランでは日本語メニューが用意されているなど、フランス語圏でありながら日本人にとっては、とても馴染みやすい雰囲気です。

ニッケル産業を中心に経済的にも安定している島で、さらにはテロの心配もないため治安がよく、女性やシニアの方々など、どなたでも安心して滞在していただける環境となっています。

フランス×メラネシアの異文化に触れる

グランドテール島南部西海岸に位置する首都ヌメアは、南仏の港町を思わせる雰囲気にもあふれた南太平洋最大級の都市です。街を歩けばコロニアル様式の建築物や壮麗な大聖堂などが点在し、フランス領ならではの洗練された趣を感じられます。また、利便性・衛生面のいずれをとっても、留学での滞在にふさわしいインフラが整っています。万が一の際の医療体制も、ヌメアでは本国フランスと同等水準の治療が受けられるので安心です。

ホテルにはキッチン付きの客室も多く、ホテル滞在での留学では、朝市や近くのブーランジュリー（パン屋）で新鮮な食材やおいしいバゲットなどを購入し、ホテルの部屋で料理して食べるといった風に“暮らすように滞在する”体験を楽しんでいただけます。



ここは美食の街でもあり、一流のフレンチ・キュージーヌからカジュアル・レストラン、おしゃれなカフェ、さらにはエスニック、和食まで多彩な選択肢が揃っているのも大きな特徴です。加えて特産の食材には、本国フランスで高級食材として知られているものも少なくありません。アミノ酸含有率が高く甘み・旨味がぎゅっと詰まったような「天使のエビ」、一つ一つ丁寧に花を受粉させて作られるバニラビーンズ、天然オーガニック100%の生はちみつなどは、ニューカレドニアを訪れたなら必ず味わっていただきたいものです。新鮮な果物や野菜、鹿肉・鴨肉などの肉類も豊富で、留学による長期滞在でも食事に不自由することはありません。



一方、ニューカレドニアにはカナックと呼ばれるメラネシア系先住民たちの伝統文化が、今なお息づいています。「ニューカレドニア博物館」や「チバウ文化センター」といった文化施設でその歴史を学んだり、離島や東海岸などの伝統文化を守り続けている村々まで足を延ばして、その暮らしぶりに触れたりしてみるのも、きっと素晴らしい体験になるでしょう。

世界遺産のラグーンをはじめとする珠玉の自然体験も

また、ニューカレドニアへの留学が本国フランスと大きく異なる魅力といえば、その希少な大自然を舞台とした数々の体験にあるでしょう。ニューカレドニアの周辺を取り囲むラグーンは、バリアリーフの全長1,600km、面積としては世界最大の2万3,400km²を誇り、2008年に、そのうちの6海域がユネスコ世界自然遺産に登録されました。

このラグーンには約1万5000種もの多種多様な海洋生物が生息しており、例えば絶滅危惧種であるウミガメ生息数は世界第2位、ジュゴン生息数は世界第3位となっています。シュノーケリングやSUP（スタンド・アップ・パドル）、グラスボトムボートなどの気軽なマリニアクティビティで美しいラグーンの魅力を経験していただくことができます。

レッスンが終わった午後には、カナル島やラレニエ島などヌメア近辺の小さな無人島へ出かけ、静かなビーチでのんびり過ごすのも素敵です。さらに休日には、“海の宝石箱”と呼ばれるイル・デ・パン、映画『天国にいちばん近い島』のロケ地にもなったウベア島などの離島へも足を延ばしてみたいはいかがでしょうか？ 本島とはまたひと



味違ったラグーンの美しさや、のどかで穏やかな時間の流れが心を癒してくれるはずです。

そして、希少で美しい自然環境は海に限ったことではありません。約8,500万年に現在のオーストラリア大陸である Gondwana 大陸から分離し、原始の姿を残したまま独自の生態系を育てているこの島は、3,000種以上にものぼる固有動植物を有しています。特にニューカレドニアのシンボルでもある飛べない鳥・カグーは、ひょっこりと森から姿を現して歩きまわる姿が愛らしく、一度はご覧いただきたい固有種です。

グランドテール島南部の「リビエール・ブルー州立公園」や西海岸中央部の「巨大シダの森公園」といった自然保護区でこうした動植物との出会いを楽しめます。手付かずに自然が残る絶景の中を、ハイキングやトレッキング、マウンテンバイク、カヌー&カヤック、乗馬などの多彩なアクティビティーで探訪するのもおすすめです。



国際基準に沿ったクオリティーの高い教育体制

ニューカレドニアへのフランス語留学となると、気になるのが現地で使われるフランス語の質ですが、ヌメアで使われるフランス語は発音も本国フランスとほとんど変わりありません。また、パリのような都会と比較すると、人々の会話のスピードがゆっくりであることから日本人には聞き取りやすく、フランス語入門者であっても安心して留学していただける場所となっています。

また、ニューカレドニアには各国から年間約1,000人の学生・社会人が語学留学に訪れています。その約8割はオーストラリアやニュージーランドの人々であり、こうした英語圏の留学生との交流を通じてフランス語だけでなく英語にも触れる機会が増えるため、幅広い国際感覚を身につけていただくことができます。

現在、日本からの留学生を受け入れている語学学校は下記2箇所です。いずれも CECR (Cadre Européen Commun de Référence /ヨーロッパ言語共通参照枠) に準じた最新教材を



用いており、本国フランスと変わらないクオリティーの高い教育体制が整っています。プチ留学から長期の語学留学まで、一人一人のニーズに合わせたプログラムが用意されていますので、本格的なフランス語留学を目指している方々はもちろん、“暮らすような旅”に憧れている女性やシニアの方々も気軽な留学体験をお楽しみください。

滞在のスタイルも、ホテルステイとホームステイからお選びいただくことができます。ホームステイでは、ホストファミリーとなるニューカレドニアの人々のおおらかで温かい人柄に触れ、心安らく時間を過ごしていただけるでしょう。

「クレパック (GREIPAC)」

ニューカレドニア政府によって運営されている公立の語学学校で、フランス国民教育省が行なっている各種フランス語試験 (DELF / DALF / TCF : フランス国籍取得のために必須) の公式会場にも指定されています。ヌメア中心部から少しはずれたヌービル地区に位置し、ニューカレドニア大学にも隣接。閑静で整った環境の中、学びに集中していただけます。歴史的にも価値のあるコロニア風建築をリノベーションした校舎も魅力的です。

高校生・大学生だけでなく社会人留学の受け入れも行なっており、レッスンは初心者～上級者 (A1～C2 レベル) まで用意されているので、一人一人の能力に合ったクラスを受講することが可能です。DELF や DALF の試験対策コースも用意されていますので、資格取得をされたい学生・社会人の方々や企業の語学研修などにもご活用いただけます。

また教師陣は、FLE (外国語としてのフランス語教授法) ・FOS (専門目的のためのフランス語) や最新の指導法についての訓練を受けています。

レッスンは平日午前中に行われ、午後は曜日により、オプションで下記のようなアクティビティーが用意されています。また、土日にも参加可能な離島ツアーがあります。

<毎日開催可能>

- ・ポンツーン 訪問 (シュノーケリングが楽しめる浮島)

<火曜>

- ・ヨガセッション
- ・チバウ文化センター訪問

(ニューカレドニアのメラネシア系先住民族・カナックたちの伝統文化について学べる文化施設)

<木曜>

- ・ニューカレドニア・ラグーン水族館訪問 (ニューカレドニアの海を再現展示。希少な海洋生物を実際に見て、楽しみながら知識を深められる施設)

・ ミシェル・コルバソン動植物森林公園訪問（飛べない鳥カグーをはじめ、ニューカレドニアの固有種に出会える公園）

<土曜または日曜>

・ アメデ島ツアー（ナポレオン三世の命によって建造された白亜の灯台からの眺めが絶景。シュノーケリングやグラスボトムボートなどで1日中楽しめる）

<その他予約制のもの>

・ チョコレート専門店「ショコラ・モラン」訪問 など

※上記は2019年4月現在の情報です。変更になる可能性もございますのでご了承ください。

個人での留学の場合は、クレパックの講習スケジュールに合わせてレッスンを受けていただくこととなりますが、学校などグループ単位での利用の場合は、1日単位から修学旅行向けプログラムをカスタマイズすることも可能になっています。語学レッスンに加えて、教師同行による博物館・水族館見学などのアクティビティーやニューカレドニア大学学生との交流会などのイベントを合わせて体験すれば、より深い異文化体験・国際交流の機会となるに違いありません。

詳細は下記 URL からご覧ください。

<公式サイト>

<http://www.creipac.nc/>

<Facebook ページ>

<https://www.facebook.com/CREIPAC.nc/>

<問い合わせ E メール>

creipac@creipac.nc

「ヴォルテール学院 (L'Institut Voltaire)」

ヌメア中心部であるココティエ広場からすぐのロケーションにあるため、通学や観光にも非常に便利です。プライベートレッスンからグループレッスンまでさまざまなニーズに対応しており、アットホームな雰囲気が評判の語学学校です。レッスンは座学だけでなく、街なかに出て地元の人々とフランス語でコミュニケーションをとるなど実践的なスタイルで行われるものもあり、楽しく学んでいただける工夫がされています。

<問い合わせ E メール>

institutvoltaire@nautile.nc

留学情報・お問い合わせについて

語学学校やレッスンの詳細については、各学校に直接、お問い合わせください。また、ニューカレドニアに日本人が渡航する場合、パスポートの有効残存期間は滞在日数に加えて3ヵ月以上が必要となりますが、滞在期間が90日間以内であればビザは不要です。それ以上の滞在期間で留学される場合は、日本にあるフランス大使館まで学生ビザを申請してください。ビザ申請時には学校側への入学申請を済ませ、仮入学許可証を取得しておく必要がありますので、ご注意ください。

さらに学校で教育旅行をお考えの場合は、ニューカレドニア観光局でも参考資料をご用意しておりますので、ぜひご一読ください。

<ニューカレドニア教育旅行ガイド PDF>

https://www.newcaledonia.travel/sites/default/files/2018-12/Educational_travel_guide_0.pdf

【海外留学レポート】

メデジンに魅せられて

-語学だけではない留学-

Attracted to Medellín:

Studying Abroad for more than Studying Language

東京外国語大学国際社会学部ラテンアメリカ地域スペイン語専攻 佐井 暢穂

SAI Nobuho

(School of International and Area Studies, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード：La-CEP、文理協働、インターンシップ、食品ロス、コロンビア留学、世界展開力強化事業

はじめに

2017年7月から2018年5月までコロンビアのメデジンにあるエアフィット大学に留学した。「日本と中南米が取り組む地球的課題を解決する文理協働型人材養成プログラム(La-CEP)」を利用して頂き他大学生との事前学習、現地でのフィールドワークやインターンシップ、そしてプログラム終了後の留学発表会を経験した。自らの研究や進路について真剣に取り組み計画を進めることができ、最高に充実した留学となったと自負しているので私の留學生活の一部を切り取って紹介する。

留學の経緯

なぜ大学での留學先としてコロンビア第二の都市メデジンを選んだのか、まず全てのきっかけから述べていこう。

私はメデジンのことは大学の協定校がある、という事実を認識するまでは知らなかった。ラテンアメリカのスペイン語圏内で私の大学が協定校を持つのはメキシコ、アルゼンチン、そしてコロンビアであり、この三つの中から私が一国を選び取る際に持っていた軸は三つある。まず一つ目は日本人にとってなじみのない国・都市であること。次に気候が温暖であること。第三に都市規模が大きすぎないこと。そうして選んだコロンビア・メデジンはこの三つをしっかりと満たしていた。

一つ目に関しては外務省による平成30年度の海外在留邦人数調査統計を見ても明らかで、メキシコとアルゼンチンにおける在留邦人総数は両国ともおよそ1万1000人を超えるのに対し、コロン

ビアは1300人を下る。海外留学をするなら日本人が少ない国を圧倒的におすすめする。なぜなら、慣れ親しんだ日本語を利用せずに自分の現地語力と対応力のみを頼りにすることになるので、経験値を積むには最も適した環境であるからだ。現に私は大学内でコロンビア発祥のダンスエクササイズ ZUMBA のクラスに毎週参加して友人を作ったり、卒業研究の為にメデジンのフードバンクやコンポストの企業へインタビューをしたり、コロンビア人のみの企業でインターンを行うなどした。これはスペイン語のみ通じる環境を積極的に選び取っていたからこそ成しえたことだと思っている。

第二の「温暖な気候」。メデジンは「永遠の春」と言われるほど年中通して気温が20度強である。四季はなく雨季と乾季があり、雨が降る時期は肌寒いこともあるが厚手のジャケットは必要ない。ただ同都市内でも標高によって気温が大幅に変わる為、街の夜景を観る為に山に行く時などは厚着をする必要がある。個人的にはこの気候がとても合っていた。他の地域と比較すると例えばコロンビアの首都であるボゴタは年平均気温が15度以下とかなり寒く、第三の都市であるカリは年平均24度で湿度が高いので、過ごしやすさで言えばメデジンが優位なのではないだろうか。

第三の都市規模に関しては、毎日の移動や大学へのアクセスの観点、そして自分の住む街にできるだけ詳しくなりたい、という思いから首都ではない都市を望んでいた。メデジンは都市規模で言えば日本の山形市とほぼ同じ面積で移動しやすい。ただ、訪れて初めて知ったのだが、交通渋滞が深刻で通勤・通学ラッシュの時間帯は空いていればおよそ10分強の距離が1時間程度かかることがあるので住むなら大学やオフィスの近くが賢明である。

ビザと身分証明書の取得：

コロンビアの学生ビザを取得するのは困難ではない。留学先の大学の証明書さえ余裕を持って入手すれば、大使館に申請して一か月もせずに発行される。現地に到着してからは全コロンビア人が持つ日本のマイナンバーのような Cédula (セドゥラ) を申請する。3か月以上の滞在ビザを持つ者は全員申請しなくてはならない身分証明書である。まず移民局のHPにてパスポート等の情報を登録し移民局に行く日の予約をする。血液型の証明も必要で事前に調べておく必要があるのを忘れずに。私は大学付近の病院で採血してもらい、後日メールにて結果を貰った。そして移民局に行く日を予約し、当日は必要書類を揃えて向かう。ここで数時間待つことになるので暇つぶしの本は必須である。書類を提出し手数料として日本円でおおよそ7000円を支払い、顔写真と指紋をとり終了だ。1週間から10日後に、HPにて証明書の発行の有無を確認できるので再度移民局に出向き受け取る。

参照：

外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf>

サンタ・プロジェクト

サンタ・プロジェクトとは日本に興味のあるコロンビア人が集う日本クラブによる年に1回の演劇活動である。日本クラブとはエアフィット大学にて日本語を教える羽田野香里先生が率いる活動で、主に日本文化を楽しみながら学ぶ活動を行っている。夏頃から毎週末練習を重ね、12月に避難民の子どもたちやメデジン市民向けにクリスマスプレゼントとして、メデジン市内にあるベレン公園図書館で上演する。(実はこの図書館は東京大学との協働で建設された。日本庭園のような落ち着きがあり市民の憩いの場所となっている。)プロジェクトの10周年となる2017年の作品に私はスペイン語のナレーターとして出演した。タイトルは「Operación Navidad(クリスマス大作戦)」。サンタクロースを助ける為に妖怪チームと不良チームが競い合い、最後には協力して子どもたちにクリスマスプレゼントを届けるというストーリーだ。

この劇は日本語とスペイン語で行われておりその上演形態は非常にユニークである。例えば「¿Qué? 何だって?」「¡Buenos días!おはよう!」という様に登場人物がまとめて2カ国語を話すので台詞を覚えるのが非常に大変なのだ。そんな困難さでも日本語と日本文化を愛するメンバーの熱量と努力でしっかり乗り越えてしまうのが驚くべきところ。日本で人気のアニメソングやコロンビアの伝統的クリスマスソングを歌って踊りながら進行し、子から大人まで楽しめる劇となっている。当日は劇前に行われる日本語レクチャーや劇中にあるギャグ等にしっかり反応してくれる子どもたちのキラキラした表情に私たち演者の方が幸せを貰ってしまった。このプロジェクトは毎年続いており、長期でメデジンを訪れる方はぜひ参加してみたい。

インターンシップ

私は今回 Cámara Colombo Japonesa (コロンビア日本商工会議所) でインターンシップを経験した。日本とコロンビアの企業がそれぞれの国に進出する場合のサポートや日本文化イベントを実施する団体である。私は日本のビジネスマナーを紹介するプレゼンテーションとビデオ作成を行い、日本進出を望むコロンビア企業が知っておくべき慣習について盛り込んだ。日本独特の名刺交換や取引先の呼称、飲み会文化などコロンビア人にとっては未知の情報を提供できたと思う。実際にコロンビア人同士の商談に参加する機会があったのだが、私が紹介した日本のビジネス風土とは差異を感じ興味深かった。名刺交換の重要度は日本ほど高くなく、商談者同士は下の名前で呼び合う。さらに仕事の付き合いでの飲み会はなく、飲食を含む会合であればランチミーティングの方が主流であるように感じた。

人生初めてのインターンシップの経験であったが、仕事のツールとしてスペイン語を使うことの難しさや要求される仕事に自分の実力を持ってどこまで応えられるか、を試された良い機会であった。

メデジンの音楽文化

ラテン文化の中で私が最も魅了されているのは音楽とダンスである。サルサ、バチャータ、メレンゲ、キソンバ、バジェナート、チャンペタ、クンビア、レゲトン…中南米発祥のダンスは総じてコロンビアでも一般的に聴かれ踊られている。踊る、というと日本では伝統舞踊や習い事の一環であるなど練習を重ねた成果を人前で披露する、といったイメージが強いかと思う。コロンビアにも伝統的な舞踊は存在するものの、それ以上にディスコ・クラブ文化が強く根付いているのと、さらに家族や友人同士で集まる時も音楽をかけて皆で踊るのが一般的である。

メデジンにはサルサ・バチャータを流すクラブが多くある。外国人が多く訪れる地域などはダンス教室・フリースタイルタイムを設けており、ダンスを学ぶことを目的とした外国人や英語を練習したいコロンビア人など老若男女が集うコミュニティが存在する。基本的にペアダンスであるので踊る時は相手を見つけねばならない。私はこのシステムのお陰で、友人の誕生日パーティーや家族の集まり、ダンスクラブの実践で踊り方を学びつつ現地人とのコミュニティを広げていった。

そして、「レゲトン」。この音楽ジャンルに触れずにメデジンの流行は語るができない。レゲトンは中南米の若者の間で流行している音楽であり、ある決まったドラムのリズムが刻まれつい癖になってしまう。リズムが一定だからこそ各々の歌手の歌い方やラップの口調などに個性が出るのでそれらを聴き比べるのも楽しい。世界中で大流行したプエルトリコ出身の歌手、ルイス・フォンシの「デスパシート」もこのジャンルである。若者が集まるダンスクラブはオールドスクール（懐メロ）から最新曲までほぼ全てレゲトンで夜が明け、街中を歩いている店内にいても大学でもどこでも聞こえてくるのはレゲトン、レゲトン、レゲトン…。サルサやバチャータとは違い基本の踊り方などは一切ないので誰でも音楽に身をまかせれば自然と踊れるのが良いところ。

メデジン、コロンビアに限らずラテンアメリカにおいてダンスは文化の一部でコミュニケーションの一環として欠かせない存在である。日本ではなじみがないが、だからこそ少しでも知っていると大変驚かれ喜ばれるので、中南米を訪れる方は予習しておくとうまいだろう。そして自分は未経験だから、と遠慮するのではなく挑戦してみると案外できるものである。メデジンにおいては無料のダンス教室がショッピングモールや公園で頻繁に行われており参加のハードルも低い。現地人と踊ってみてダンスカも友好の場も広げてほしい。

研究

私は、留学当時食品ロスとフードバンクの活動について興味を持ちメデジンにおける食品ロス活用の取り組みについて調査を行った。フードバンクとは「食料銀行」を意味する社会福祉活動でまだ食べられるのに、様々な理由で捨てられてしまう食品を救済し、それを必要とする人や施設に届ける活動のことである。日本においてはセカンドハーベストジャパンが最も大規模に活動を行っている。

一つはメデジンにおいて活動する SACIAR というフードバンクでインタビューを行なった。SACIAR とはスペイン語で「(飢え、渴きを)癒す。満足させる。」という意味である。この組織はメデジン郊外の農民や国内紛争による避難民、貧困層や先住民に食料や日用品を分配している。食料の供給源は大手のスーパーマーケットや一般人の寄付から成り立つ。基本的に世界のフードバンクの活動はどれも類似しているのだが国の食品寄付に関する法律や再分配の対象者は国ごとに異なり、例えば日本とコロンビアにおける社会的弱者の生活を、フードバンクを通して比較することができる。さらにヨーロッパが率先して進め、日本も本年成立が決まった食品ロス削減に向けた法案により、フードバンク活動にどこまで拡がりが出るのか、についての検討も可能である。

次に食品コンポスト(たい肥化処理)の処理槽を作る企業 EARTH Green COLOMBIA へのインタビューを行った。コンポストとは有機物を微生物の力で分解したい肥化することだが、本企業はプラスチックなどの無機物も分解できる技術を持ち画期的であった。会社がある周辺の地域住民の家庭からごみを無料で回収し出来たい肥の販売もしている。この処理槽は私が在学したエアフィット大学にも設置されており、学食から出た残飯の一部をたい肥化して大学内で農業を行う学生が利用するなど循環システムが出来上がっていた。食料は食料として消費することが一番ではあるものの、異なる形にして再利用を行うことも食品ロスへの対策の一つとして可能性を感じた。

これらのフィールドワークを通じて、現場で働く人の思いやボランティア精神、環境改善にかける思いなどを知ることができた。一つの活動内容においても様々な目的が存在することを実感し、個の事象に関しても複数の要素を洗い出すことでより詳細に理解できる、と感じた。この経験は今後の卒論の進行だけでなく自らのキャリアを考える際に活かしたい。

留学後発表会

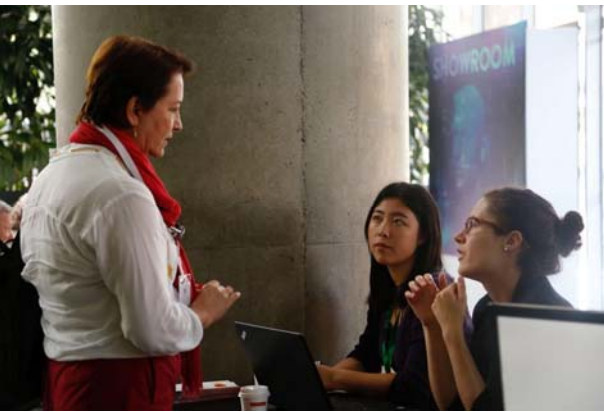
留学後に La-CEP の参加者が集まり、それぞれ留学中の研究活動やインターンシップについて報告した。東京農工大学と電気通信大学の学生たちの理系研究の話は新鮮で、東京外国語大学の仲間の報告は同じラテンアメリカ地域に留学したと言えど、それぞれの興味範囲は驚くほどに多様であった。貧困や孤児問題という普遍的な社会課題に対しても国によってその構造は異なり、さらに解決の為のアプローチ方法は無限に存在することを実感した。それぞれの学生がその中で最も興味を惹かれた活動を行い、知見を深め、今後の人生の方針に関わる経験を得ることができただろう。

おわりに

今回の留学では、言語を学ぶのではなく、自らの興味や研究の幅を広げる為にスペイン語を活用することができた。その成果として、留学終了後に、読・書・聴・話の四技能が試される DELE スペイン語検定の C1 (上級) を取得することができた。今後も最上級の取得を目指して引き続き勉強をしてい



コンポストの処理槽



インターンシップで企業イベントに参加した際の一枚

【海外留学レポート】

留学のすすめ

-留学で学ぶ、自分-

Take a Chance to Study Abroad: Discovering Myself in Vietnam

株式会社丸井グループ 二階堂 夕海

NIKAIDO Yuumi

(MARUI GROUP CO., LTD.)

キーワード：交換留学、ベトナム、初海外、ASEAN、インターンシップ、トビタテ!留学 JAPAN

1. はじめに

私は大学2年生の後期に、ハノイ大学 Faculty of Management and Tourism (以下FMT) における1学期間の交換留学を行った。この経験は大学生活の中でも特に精神面での成長を感じる機会となったことから、振り返るたびにこの経験に恵まれた自分を幸運に思うとともに留学実現に関わっていた方々へは何度でも御礼を言わせていただきたいと感じる。

今回はそんな私の留学経験について、実現までの道のりから帰国するまでを簡単に紹介していく。一人でも多く留学への一歩を踏み出すきっかけとなるようなものになっていただければ幸いだ。

2. ベトナム留学のきっかけ

大学在学中に長期留学をするというのは、私にとって高校生の時からの目標であり夢であった。英語の音の美しさに惹かれ、大学を卒業する時にはネイティブスピーカーのようにきれいに、話せるようになりたいとの思いがあったからだ。

しかし結果として私が留学したのは非英語圏のベトナムである。高校生の時に想像していた留学とは、英語圏に行って学校で英語を学び、またその地で生活することで異文化理解をする、というものだった。もちろんそういった留学プログラムも存在し、ひとつの海外経験をするという点で意味はあるものだと思うが、実際に大学で留学関連の情報を集めていくと様々なことが分かってきた。まず、私が在籍していた大学は世界各国の様々な地域に協定校を持っており、留学とは何もアメリカ・カナダ・オーストラリアなどの英語圏のみへの渡航に限られるものではないということ。そして、当たり

前かもしれないが、留学は英語の力をつけるためだけのものではないということ。特に私が目標としていた交換留学の場合には、留学先の大学で現地の学生と共に授業を履修し単位を得るところまでできるので、何か専門的な学びに海外で取り組むことができる。

そうして私は、英語を使ったおもてなしをする仕事として興味を持っていたホテルや旅行などの観光産業に関わりのある留学にチャレンジしたいと考えるようになった。私の大学との協定校のうち観光分野を学ぶことのできる大学は複数あり、中には英語圏の大学もあった。英語圏の大学を希望しようかと丁度渡航先について考えていた時期に、海外協定校の学生と共に英語で学ぶ短期集中講義が学内で開催され、そこでハノイ大学からの参加学生に出会ったことが、結果的にベトナム留学の決め手となった。彼女は自分と同じく英語の第二言語話者であるにも関わらず流暢に英語を話し、また他大学のネイティブスピーカーの前でも堂々と発言していた。当時英語を話すことに今以上に難しさやハードルを感じていた私は、そんな彼女にとっても感銘を受け、彼女が在籍するハノイ大学への関心が高まっていった。私が留学を始める時には彼女はすでに卒業していたので、一緒にキャンパスで勉強するということはなかったが、留学を振り返ってみて自分はいい選択したと心から感じている。

3. 大学生活

ハノイ大学では履修者の国籍に関わらず、基本的に全ての授業が英語で行われている。私は日本の大学では言語学を専攻しており、経営や観光について学んだ経験がなかったので、外国語で受けるということに加え「新たな学問分野である」ことに緊張と期待をしていた。

1学期間の交換留学ということで、私はFMTの3つの授業を履修した。ハノイ大学では1つの科目に関し、内容をインプットする講義の授業とケーススタディを用いて学んだことをアウトプットするディスカッションの授業が週に1回ずつあったので、一つの授業に向ける熱量は日本にいた頃よりも多く感じた。特にアウトプットの場合には、毎回の授業の内容をしっかりと理解した上で自分で考えたことをクラスで共有することが求められたため、予習・復習を大切にすることができた。

英語を使う・英語で考える時間が格段に増えたことで語学力の向上につながったことはもちろん、日本にいる頃と比べて共同でこなす課題が多く、苦手意識のあったグループワークに取り組むことになったのは自身の成長につながったと実感している。苦手ながらも必然的にやらねばならない状況の中で必死に取り組むうちに、他人に頼ること、協力すること、一緒に頑張ることその達成感を人生で最も感じる時間になった。そんな気持ちの変化が行動として現れたのだと留学を振り返った時に感じるのは、ある科目の先生が試験勉強をグループでやることの意義について授業で教えてくださったことをきっかけに、自分が試験対策グループの立ち上げ者としてクラスメイトに声をかけ、休日に共に勉強したことだった。留学前には、できる限り全て一人で完結させることを好んだ自分が、一歩踏み込んだ提案をして、勉強に役立つだけでなくいい思い出となるような機会をつくることができたのは

本当に良かった。

4. エピソード

最後に、私の留学生活で最も印象的な一日のことを紹介したい。実は私の留学は二部構成で、ハノイ大学で学んだ後にベトナム南部の観光地ホーチミンでホテルインターンを行ったのだが、インターンに向けてハノイを立つ前日の出来事であった。この日を共にしたのは Tourism Guiding Skills という授業を一緒に学んだクラスメイトで、彼女たちはことあるごとに私のために集まって、誕生日や成人の日まで祝ってくれていた。ホーチミンへ立つ前日は一日中私と一緒に居てくれ、念願のアオザイを着た写真撮影に始まり、ごはんを食べて散歩をし、夜中までカフェで語り合った。1学期という短くも沢山の思い出に溢れた時間を共に過ごした友人たちともいよいよお別れというところで、私は生まれて初めて別れが悲しくて涙が止まらないという状況になってしまった。そんな自分にとっても驚き、同時にそんな強い感情を持つような関係を彼女たちと築けたことがとてもありがたく、嬉しい気持ちで胸がいっぱいであった。彼女たちのお陰で、初めての海外経験であり高校生からの夢であった留学を経験したベトナムという国が大好きになった。別れてからまだ再会はできていないが、2年以上たった今でも彼女たちとは SNS を通じて交流があり、生涯の友人としていい関係を末永く続けていくつもりである。



(ハノイ最終日、大学にてクラスメイト達と)

5. まとめ

留学を通して最も価値ある学びとなったのは、他者との関わることに對してより前向きに考えられるようになったことである。ベトナムで自分の新たな側面に気が付くことができ、「人の心を動かすのは人である」という、これからの自分の軸となる価値観を見つけられた。これは帰国後の学生生活の、大げさに言えば「人生」の大切な軸となり、満足のいく就職活動を経て現在の会社にたどり着けたという部分にまでつながったと感じている。

私の周りには留学を経験している人たち、もっと言えば私よりも学術的に深い取り組みを経験してきた優秀な人たちが沢山居り、また留学やインターンシップなどの理由から、いわゆる「ストレートで大学卒業から就活へ進む」という道を選んでいない人も数多くいる。私が留学を実現する上で、金銭的な問題を解決するに加え、よりよい留学としていけるように様々なサポートを提供してくれた『トビタテ留学 JAPAN』もそうだが、今は奨学金の制度は数多くある。留学前と後とでは、後の自分の方が好きだと感じる私からすれば、少しでも留学したいという意志がある人には「就職が」「お金が」とすぐに決めつけないでいただきたいと思う。これから先、長い人生でこの留学経験は私を支えていくであろうと思うので、一人でも多くの方にもそれぞれ自分について深く考えるきっかけや、夢の実現などの手段として留学を経験してもらいたい。

【インフォメーション】

平成 29 年度 外国人留学生年間受入れ状況調査、並びに、 外国人留学生進路状況・学位授与状況調査 結果の公表

日本学生支援機構留学生事業部留学情報課企画調査係

(Information Services Division, Student Exchange Department,
Japan Student Services Organization)

本機構では、「外国人留学生在籍状況調査」では把握しきれない、各年5月1日以降に在籍した外国人留学生の状況を把握することを目的として、日本の高等教育機関及び日本語教育機関に在籍していた外国人留学生総数を把握するための調査を実施しています。今回公表したのは、平成29年度中の状況を把握したもので、過去最高の人数336,320人でした。高等教育機関、日本語教育機関ともに前年度比で増加しています。

1. 在学段階別留学生数				
在学段階	留学生数（人）		前年度比増減	
	平成29年度	平成28年度	人数（人）	増減率（%）
高等教育機関	224,959	203,133	21,826	10.7
日本語教育機関	111,361	96,609	14,752	15.3
合計	336,320	299,742	36,578	12.2

2. 出身地域別留学生数（高等教育機関）				
地域名	留学生数（人）		前年度比増減	
	平成29年度	平成28年度	人数（人）	増減率（%）
アジア	201,124	180,731	20,393	11.3
欧州	11,376	10,592	784	7.4
北米	5,097	4,729	368	7.8
アフリカ	2,815	2,553	262	10.3
中南米	1,777	1,691	86	5.1
中東	1,750	1,895	▲145	▲7.7
大洋州	1,014	938	76	8.1
その他（無国籍）	6	4	2	50.0
合計	224,959	203,133	21,826	10.7

3. 出身地域別留学生数（日本語教育機関）				
地域名	留学生数（人）		前年度比増減	
	平成29年度	平成28年度	人数（人）	増減率（%）
アジア	106,713	92,835	13,878	14.9
欧州	3,407	2,741	666	24.3
北米	597	488	109	22.3
中南米	215	170	45	26.5
アフリカ	199	138	61	44.2
中東	118	144	▲ 26	▲ 18.1
大洋州	110	89	21	23.6
その他（無国籍）	2	4	▲ 2	▲ 50.0
合計	111,361	96,609	14,752	15.3

また、本機構では、卒業（修了）した外国人留学生の進路状況、並びに、我が国の大学院において学位の授与があった外国人留学生の状況について調査しています。今回公表したのは、平成29年度中の状況を把握したもので、前者については、前回比で卒業（修了）留学生の総数の増加割合が日本国内で就職あるいは進学をする留学生の増加割合とほぼ同じです。

学種	日本国内				出身国 （地域）	日本・出身国 （地域）以外	小計
	就職	進学	その他	計			
博士課程	677	83	645	1,405	1,403	142	2,950
	22.9%	2.8%	21.9%	47.6%	47.6%	4.8%	100.0%
修士課程	3,215	1,693	971	5,879	3,565	429	9,873
	32.6%	17.1%	9.8%	59.5%	36.1%	4.3%	100.0%
専門職 学位課程	313	17	112	442	410	49	901
	34.7%	1.9%	12.4%	49.1%	45.5%	5.4%	100.0%
大学 （学部）	4,418	2,080	1,001	7,499	3,030	383	10,912
	40.5%	19.1%	9.2%	68.7%	27.8%	3.5%	100.0%
短期大学	272	115	41	428	92	4	524
	51.9%	21.9%	7.8%	81.7%	17.6%	0.8%	100.0%
高等専門 学校	9	195	0	204	17	1	222
	4.1%	87.8%	0.0%	91.9%	7.7%	0.5%	100.0%
専修学校 （専門課程）	7,246	9,047	3,372	19,665	2,763	120	22,548
	32.1%	40.1%	15.0%	87.2%	12.3%	0.5%	100.0%
準備教育 課程	92	1,638	26	1,756	362	6	2,124
	4.3%	77.1%	1.2%	82.7%	17.0%	0.3%	100.0%
計	16,242	14,868	6,168	37,278	11,642	1,134	50,054
	32.4%	29.7%	12.3%	74.5%	23.3%	2.3%	100.0%

また、後者については、前年度比で博士課程、修士課程ともに増えていることを示しています。

専攻分野	博士課程									
	平成 29 年度 学位授与数		論文博士 授与数 (内数)		標準修業年限内での学位授与状況					
					a. 入学者数		b. 標準修業 年限内での 学位授与数		b/a	
	(人)		(人)		(人)		(人)		(%)	
人文科学	165	(119)	2	(6)	261	(293)	64	(47)	24.5%	(16.0)
社会科学	167	(202)	3	(6)	305	(346)	85	(104)	27.9%	(30.1)
理学	179	(168)	4	(4)	232	(185)	144	(117)	62.1%	(63.2)
工学	919	(879)	15	(12)	1,110	(1,037)	681	(626)	61.4%	(60.4)
農学	327	(315)	12	(17)	361	(329)	249	(217)	69.0%	(66.0)
保健	363	(362)	9	(9)	408	(401)	295	(297)	72.3%	(74.1)
家政	3	(6)	0	(3)	6	(4)	1	(1)	16.7%	(25.0)
教育	21	(20)	1	(1)	38	(36)	7	(4)	18.4%	(11.1)
芸術	29	(26)	0	(0)	41	(34)	18	(18)	43.9%	(52.9)
その他	816	(750)	39	(28)	1,115	(1,049)	528	(466)	47.4%	(44.4)
計	2,989	(2,847)	85	(86)	3,877	(3,714)	2,072	(1,897)	53.4%	(51.1)

() 内は平成 28 年度の数

専攻分野	修士課程									
	平成 29 年度 学位授与数		標準修業年限内での学位授与状況							
			a. 入学者数		b. 標準修業 年限内での 学位授与数		b/a			
	(人)		(人)		(人)		(%)			
人文科学	1,141	(1,047)	1,172	(1,106)	1,030	(946)	87.9%	(85.5)		
社会科学	3,071	(2,965)	3,136	(3,085)	2,762	(2,656)	88.1%	(86.1)		
理学	225	(184)	231	(186)	214	(176)	92.6%	(94.6)		
工学	2,191	(2,119)	2,285	(2,186)	2,091	(2,000)	91.5%	(91.5)		
農学	518	(452)	540	(462)	503	(437)	93.1%	(94.6)		
保健	201	(187)	210	(197)	199	(181)	94.8%	(91.9)		
家政	21	(29)	22	(30)	16	(18)	72.7%	(60.0)		
教育	319	(379)	334	(374)	299	(341)	89.5%	(91.2)		
芸術	390	(296)	410	(298)	380	(282)	92.7%	(94.6)		
その他	2,782	(2,617)	2,902	(2,702)	2,572	(2,377)	88.6%	(88.0)		
計	10,859	(10,275)	11,242	(10,626)	10,066	(9,414)	89.5%	(88.6)		

() 内は平成 28 年度の数

詳細は下記 URL でご覧ください。

URL : https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_d/data18.html

※本調査でいう「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表第1に定める「留学」の在留資格（いわゆる「留学ビザ」）により、我が国の大学（大学院を含む。）、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）、我が国の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設及び日本語教育機関において教育を受ける外国人学生をいいます。

※日本語教育機関で学ぶ留学生数については、「出入国管理及び難民認定法」の改正（平成21年7月15日公布）により、平成22年7月1日付けで在留資格「留学」「就学」が一本化されたことに伴い、平成23年度より調査対象としています。

※四捨五入した数を使用している表では、内訳の数の合計が、計欄の数と一致しない場合があります。

次号予告

特集「新たな外国人留学生」

リクルーティング先・方法の多様化、新たなプレイヤーの役割、外国人留学生の獲得戦略(予定)

編集後記

ゴールデンウィークの大型連休中に、新たな「令和」の時代がスタートしました。令和初の『留学交流』になります。平成時代と変わらず令和もどうぞ宜しくお願い致します。

さて、今月は「海外留学することの意義」と題し、事例紹介では、「フィリピン短期英語留学市場の今後」、「ニューカレドニア留学の魅力」というタイトルでご寄稿いただきました。また、海外留学レポートではコロナピア留学とベトナム留学をお伝えしております。

日本人学生の海外留学支援に携わる皆様に参加者としていただけるような内容を目指してまいりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

(編集部・T)

Web Magazine “Ryugakukoryu” (Student Exchanges)

“Ryugakukoryu” delivers a variety of necessary information and materials to faculty and staff engaged in acceptance and dispatch of international students, and educational guidance.

The magazine has been made public online without charge since April 2011.
(Issue date: 10th of each month)

ウェブマガジン『留学交流』2019年5月号

Vol.98

令和元年5月10日発行

編集 独立行政法人日本学生支援機構

(編集部)留学情報課

東京都江東区青海2-2-1(〒135-8630)

電話 (03)5520-6111

FAX (03)5520-6121

Eメールアドレス ij@jasso.go.jp

本誌へのご意見、ご感想は、こちらのメールアドレスまでお願いいたします。